

第十一 門違ひ

手料理を人に饗するものは先方の胃袋が堪ふると否とに頓着無く多食せらるゝを快となす癖あり、主人の中川自慢顔に「大原君、その四角な大きな肉を試して見給へ箸で自由にちぎれるよ、それが長崎有名の角煮と云つて豚料理の第一等、本式にすると手數も随分かゝるが非常に美味いものだ、一つ遣つて見給へ」と頻に薦められ客は箸にて其の肉をちぎり「成程ちぎれる、是れは美味い、是れは非常だ、何うして拵へるのだ子」主人笑ひながら「是れは迂つかり教へられん、傳授料が要るよ、長崎でも同じ角煮と云ひながら家に依て少づ、料理方が違ふ、僕の家の支那人直傳の東坡肉と云のだ、今に君が家でも持たら妹に命じて君の御妻君に教へて進ぜやう」大原は失望の氣味「イヤそれは少しお門違ひ、僕は御令妹の調理された者を食度いのが志願だ子」御本人の娘も大原の心を察せず「お教へ申すと云ふ程に出来ませんが奥さんがいらつしやいましたらお互に知た事の御交換をして戴き度いのです、小山さんにも先日願ひまして南京豆のお料理を習ひに出ます積りです」と何處までも餘所々々し、大原張合無く「困りました子爾う被仰つては、僕の様な者の處へ嫁に来て呉れる人がありません」と窃に先方の氣を引いて見る、生憎娘は何とも答へず主人が串談に「アハ、来て呉れる人があつても君の大食を見たら膽を潰して逃げ出すだらう、お登和や、豚鬺餛が出来て居るなら私にお呉れな」妹「ハイ、お客様にも差上げませうか」と大原の様子を窺へども大原は打萎れて黙つて居る、今度はお登和が張合無く「誠に不出来でお口に合ひますまいから」と謙遜の言葉も大原の耳には怨言らしく聞え「イ工戴きます、何でも戴きます、貴嬢のお手料理なら死ぬまで辞しません」と我が意氣組を知らせる積り、此時娘は料理と共に酒の銚子を持ち來り「兄さん漸とお爛も出来ました、料理の方で火を使ひましたからお湯が皆んな冷めて了つて遅くなりました」と食卓の上へ置く、主人は深くも飲まぬと見えて小さな盃へ半ば程注がせ「大原君、君は何うだ子」

客「飲むさ、酒が来れば復た食べられるから子、僕は酒を美味いと思はん、寧ろ不味くつて我慢する方だが腹が張つた時飲むと胃を刺撃して再び食欲を起す、僕の酒は食ふ為めに飲むのだ」主人「何でも食ふ事計り、アハ、お登和や、一つお酌をしてお進げ」大原「有難い、此の酒計りは特別に美味いよ」主人「上等の酒を吟味してあるから子」大原「ナニ爾う云ふ譯では無い、酒のお陰で復た食べられる、豚鬺鈍も結構だ子」主人「まだ此外に豚と大根の料理だの、豚とマカロニだの、豚とそうめんだの、豚料理は澤山あるから追々御馳走する事にしやう、折々遊びに遣つて來給へ」大原「毎日でも來るよ」とは御馳走を目的とするにあらず、然るに娘は誤解しけん「ホントにお早く奥さんをお持ちになると宜う御座います子、私も遊びに上つて色々なものを拵へますのに」大原再び失望「何卒モ―奥さん／＼と言つて下さるな、情けなくります」主人「情けないとは可笑しいでないか、何が情けない」大原「情けない事があるのだよ」と到底我心人に通ぜず、

第十二 胃袋

人の無情は恨むに由無し、大原はせめてお登和嬢の料理を飽食して其心を迎へんと「お登和さん、あんまりお手料理が美味う御座いますからお汁をモ―一杯お更りを願ひ度いもので」と苦しさを耐えてお更りの催促、娘は賞翫されるほど張合あり、「ハイ何杯でもおかへ下さい、序にそぼろと角煮もモ―一皿づ、召上つたら如何です、豚鬺鈍をお更へ下さい」大原「ハイ／＼何でも戴きます、貴嬢のお手料理とあるから格別の味が致します」妹「何う致しまして誠に不出來でお恥しう御座います、國の母が居りますとモット美味く拵へますけれどモ―と兎角返事が横に外れる、大原は戻かしそうに「イ、工貴嬢のお拵へなすつたのが何よりです」と言葉に力を籠て言へど娘はよくも聞取らずして臺所へ立つて行く、主人の中川大原の言葉に答へ「君、僕の母は料理が上手だよ、妹如きものでない、母の料理を君に食べさせ度い子」大原「イヤ僕は御令妹のに限る」と言う處へお登和嬢がお更りの品々を持ち來る大原手を出して盆の上より受取り「是れは憚りさま、今度は最初よりも澤山です子、少しお待ち下さい、最早酒の刺激力が

利かなくなりましてから甚だ失禮ですけれども少々御免を蒙ります」主人「何をするので」大原「御令妹の前で甚だ相濟まんけれども折角の御馳走を戴く為めに今袴を脱いで帯を弛める、先刻から帯が腹へ喰ひ込んで痛くつて堪まらない、帯を弛めると復た二三杯は食べられる」主人「驚いた子、腹の皮はゴム製に違ひ無いが君のは最早弾力を失て伸たら縮まらん、お登和や、あんまり澤山お盛りで無い、もしや大原君の腹の皮が破裂すると大變だ、然し大原君、君の腹の容積にも限あるだらうが、よく爾んなに入る子、一朝一夕に胃袋を擴張させやうとしても到底爾うはなれる者で無い」大原「全く子供の内の習慣だ、僕の田舎では赤兒がまだ誕生にならん内から飯でも餅でも團子でも炒豆でも何でも不消化物を食べさせる風だから大概な赤兒は立つ事も碌に出来ないで茶漬飯を茶碗に一杯位食べるよ」お登和「オホ、」と思はず笑ひ出す、主人は可笑しさよりも氣支はしく「それでは腹部計り膨満して身體が發達しまい」大原「勿論さ、大抵な小兒は脾疝と云ふ病氣の様に手も足も細く痩せて腹計り垂れそうになつて居る、赤兒と云ふものは斯う云ふものと僕は信じて居たが東京へ來て初めて手足の肥つた赤兒を見た、それでも御方便なもので十歳以上まで生長すると山の奥の寒村だから自然と山や谷を飛び歩く様になつて手足も始めて發育する、その代り十歳位な小供でも東京邊の大人位食物を喫する子、大きくなつたら三倍乃至五倍だらう、女でも大概一升飯を平らげる、誰だつ僕に話したよ、僕の地方へ來て農民が重箱よりも大きな辨當箱を腰へ下げて居るから家内中の辨當を獨りで持つて行くのかと思つたが食べる時見たら一人で平らげたと驚いて居た、僕なんぞは國へ歸るとまだ少食の組だよ、僕等位の年の者は雑煮餅の三十枚位平氣だから子、外の家へ御馳走のお客にでも往つて見給へ、お強鉢と云つて倒れる迄食べなければ承知しないから」と地方到る處此弊あり、

第十三 腦と胃

大食の弊害は天下に滿てり、國の文野を知らんと慾せば先づ其人民の食物を検すべし、主人の中川も慨然として「大原君お強鉢の事は豫ねて話に聞いて居たが實際爾んなものか、然しそれでよく生きて居られ

る子、胃袋が破裂せんで生命を保てる子、爾ういふ大食の人でも六十や七十まで生きられるか知らん」大原「生きるから妙だ、七十八になつてもまだ若い者に負けない程食ふ人がある、その代り満身の營養分を胃袋へ消費して了ふ、腦なぞは更に發育せん、知識も進まず思慮も出ず、腦力は丸で働かずに死ぬまで胃袋の御奉公をしてさふ、全體人は生きて居るために食物を喫するけれども大食の者は食ふために生きて居るのだ、あれで腦を使つたら逆も生きて居られんよ、よく注意して見給へ、大食の人は必ず腦が鈍い、腦病に悩む人は大概胃を壊すからだ、第一僕が何より證據ではないか、君等と同じ様に大學へ入つて試験の度に落第して三年も後れて僅に卒業し得たのは全く腦が鈍いからだ」と自分を以て例となす、是程確な説は無し、中川も笑ひ出し「それ程よく知つて居るならチツト食物を控へたら宜からう、腦の鈍いのはあんまり自慢にもならんでないか」大原「それが子、飲酒家の禁酒と同じ事で惡るいと知りつ、中々廢められん、自分でよく知つて居るが食物に向ふと何うしても制する事が出来ん、腹一杯に飽食した後は氣が重くなつて暫らく茫然として腦の働らきは一時全たく休止するのがよく分かるよ、それは全く全身の血液が胃袋へ計り聚中して腦へ送るべき血液が空虚になるからだ子、譬えて言へば腦の機械へ注すべき油を胃の方へ取つて了ふからだ子」中川「サア大體に於いては爾うに違ひ無いが、近頃研究したる最新の學説に依ると多食した後に腦の鈍くなるのは食物の中毒作用と云ふ子、化學上の研究からその新事實が発見されたけれども妙なものさ、何んな食物でも人の體中へ入ると間斷無く化學作用を起して居る、決して空然と遊んで居るものは無い、健全の胃へ適度の分量だけ入つた食物は直ちに消化されるけれどもその以上の食物は胃の消化作用を受けつけない、受けないと云つてボンヤリとして居ない、食物自身が一種の腐敗作用を起し中毒性の物と變じて直接に腦神經を刺激する、それがために腦の働らきが鈍くなつて氣が重くなる様な眠くなる様な心持ちがするのださうだ」大原「成程爾うか知らん、少々氣味が悪い子」中川「ところが君の様に毎日食物中毒を起して居ては腦が疾に消えて亡くならなければならん、そこには御方便な事がある、人體の喉に甲状線と云つて大きな筋がある、今迄は何の効用をなす筋だか分らないで不用な贅物に數へられた、然るに近頃の研究で甲状線は全く食物の中毒作用を防禦する大

効能がある事を發見した、常に食物の消毒作用解毒作用をなして腦を保護する大忠臣だと解つた、丁度今迄無用視された副腎が澱粉消化の大効用ありと知られた様なものだ、して見ると君が腦の全く自滅して了はないのは甲状腺のお陰かも知れないぜ」大原「難有い譯だな、お登和さん、斯んなお話しを聞くと少々心細くなりましたからモ一晚餐はお終ひにしませう、何卒お茶を頂戴」お登和微笑み「差上げ度くつてもモ一種が盡きました、残らず貴君が召上つてお了ひで、オホ、それでもお皿だけは残りました」と娘も中々戯言を言ふ、

第十四 廢物利用

豚料理の食卓は忽ち勝手へ運び去られたり、娘お登和が盆へ載せて持來れるは珈琲茶碗と小さき菓子皿「大原さん、食後のお菓子を一つ召上つて御覽なさい是れは林檎の淡雪です」大原は苦しうに我腹を撫で「モ一何うも水も通りません」主人笑ひを忍び「だが子大原君、是れも矢つ張り化學作用の一つで肉を食べた後に菓物を喫すると消化を助けるぜ、食物と食物とがお互に消化作用をする、昆布と竹の子と一所に煮ると双方とも非常に柔らかくなる様なものだ、餅を澤山食べ過ぎた時大根卸しを喫すると忽ち胸がすくのも其譯だ、心太を食べて黄粉を舐めると心太が溶けて了うし、牛肉を食べた後にパインナブルを喫すると消化が速い、試みに牛肉へパインナブルの汁をかけて置くと肉が溶けて筋計り残るそうだし、何んでも肉の後に菓物を喫するのは可いよ、一つ遣て見給へ其淡雪は口へ入れると溶るぜ」と言はれて、大原も人匙口へ入れ「成程溶ける非常に美味い、お登和さんのお料理だと思ふと一層美味う御座います、是れは林檎を何うしたのです」と段々直接に言葉を交へんとす、お登和はその褒詞食物に在りと信じ「それは貴君が下宿屋でなさる事も出来ず、先づ林檎の皮を剥いて小さく切て心を除つて鍋へ入れますが水は少しも要りません、水氣が少しでも交ると早やく悪くなり、水無しにお砂糖を少し入れて最初は螢の様なト口火へかけて置くとその温氣で林檎から汁が出て鍋一杯になります、其の時段々火を強くして暫らく煮ると林檎が柔かになつて、それを汁と一所に裏漉にしてゼラチンで寄せるのです」大原

「ゼラチンとは何です」娘「西洋の食用膠で、食品屋には何處にでもあります、大林檜一ツへ薄いゼラチンならば二枚位厚いのなら一枚位を水へ漬けて置くと柔になつて火にかけると直きに溶けます其中へ林檎の裏漉しにしたのを入れてよく掻き交せてそれから器ごと水の中へ漬けると寒い時には一時間位で冷へて固まります、林檎はフライにしてもお菓子にしても何の料理に使つても結構ですが此の淡雪が一番美味う御座います、ゼラチンと交ぜる時レモンとか杏の液とかを加へると尚ほ美味くなります」と御馳走よりも講釋が多し、大原今度は珈琲を飲み「是れは色が薄くつて味が濃くつて大層妙ですな」お登和「それは玉子の卵白でアクを除りましたのです」大原「ハイ随分贅澤な珈琲ですな」お登和「贅澤の様で贅澤ではありません、外の事で玉子を割りますとその殻をそっくり保存つて置きます、殻の中へ幾らかづ、白みが残つて居ますから空氣に觸れない様にして置くこと固まりません、珈琲を煎じる時一人前にその殻を二つか三つも交せてよく碎いて掻廻しますと珈琲のアクがすつかりその殻について了つて漉さずに茶碗へ注いでも黒い粉が出ません、第一味が淡泊になつて結構です」大原「成程所謂の廢物利用ですな、注意一つで何でも役に立ちますネ」主人「だから君が妻君を貰つたら僕の家へ稽古によこし給へ、食物の廢物利用はまだ外にも澤山あるから」大原「腹た其事を言ふ、僕は泣き度くなるよ」と遂に暇を告げて下宿屋に歸りぬ、今夜の夢には定めてお登和嬢を見む、

第十五 昨夜の夢

思ひつゝ、寝ればや人の見えつらん夢と知りせば覺ざらまじを、大原は昨夜の夢の現に残り濁り嬉し顔に朝早く臥戸を出で洗面場に到り其歸りに隣室の前を過けるに隣室に下宿せる大學の書生二三人頻に大原の顔を眺めてクスリ／＼と笑つて居る、大原足を停め「ヤアお早う、諸君はナゼ僕の顔計り見て笑つて居ます、顔に何かついて居ますか」書生の一人「アハ、ついて居ますとも、絶世の美人がついて居ますしかも其の名をお登和さんと云ふ美人が」大原眼を圓くし「ナニお登和さん、何うしてそれを知つて居るだらう」書生「知つて居るから不思議

でありませんか、コレお登和、林檎の何とかを拵らへて呉れ、豚のお刺身が食べ度いなんぞは廉くありません子」大原愈々驚き「それは全體何うしたのです」書生「何うしたにも斯したにも昨夜の寝言と云ふものはありませんでした子、宵から朝まで寝言の言ひ続け、コレお登和斯うして呉れ、ソレお登和あ、して呉れとお登和さんと云ふ名が百遍も出ましたらう、貴君は食氣一點張で女なんぞは振向きもしないと思つたら油斷がなりません、そのお登和さんと言ふのは何です、お嫁さんの候補者ですか」と言はれて大原急に間が悪く「イヤ何うも飛んだ處を聞かれましたな、爾んな寝言を言つたか知らん」書生「言はなければ僕等が知らう筈も無い、餘程の御熱心ですな、貴君の顔の前にお登和さんと云ふ人の姿がブラ下つて居ませう眞直に白状なさらんと此の関門を通しませんよ」大原「ヤレ／＼少々驚いた子、ナ―二昨日僕の友人の家へ往て其妹に御馳走されたのです、其事が寝言に出たのでせう」書生「御友人の妹さんならお登和さん斯うして下さいと他人らしく言ふべきです、お登和／＼と女房らしく呼棄になさるのは内々其美人に野心があるのです子、爾うに違ひありません、それなら打明けて僕等に相談なさい、女の事にかけては僕等の方が貴君より餘程老巧ですよ」大原「成程、それに違ひ無い、ナニ子、深い野心がある譯で無いが其人を僕の嫁に貰つたら丁度宜ひだらうと思つて今日は一つの友人に橋渡しを頼もうと思つて居るのです、何うでせう出来ませうか」書生「出来るか出来ないか僕にも分りませんが先方にも其心が見えるのですか、以心傳心默契の中に貴君の心が通じて居るのですか」大原「イヤ一向通ぜん、何うか通じさせ度いと思つても向ふは電氣の不導體の如し」書生打笑ひ「それでは急に橋渡しを頼んでも駄目です、先づ其の人の心を此方へ引寄せて置かなければ効がありません、何か先方の悦びそうなものを遣つて少しづつ、機嫌を取るのですな」大原「何を遣つたら宜いでせう」書生「娘ならば先づ半襟位かな」大原「半襟を買つて持つて行かうか」書生「爾うなさい、それが一番です」大原「然し僕は半襟と云ふものを買つた事が無い、何んなものを持つて往つて悦ばれるか譯が分らん、困りました子」書生「では僕等がちよいと小間物屋へ走つて良いものをつ買つて進げませうか」大原「何卒爾うして下さい」と妙な處に援兵あり、